

<実践事例>

初年次キャリア教育科目の履修過程における学生の個人内変化 —CAVTと能力習得度に着目して—

小山 治¹

本稿の目的は、初年次キャリア教育科目の履修者に対する3時点にわたる質問紙調査によって、初年次キャリア教育科目の履修過程における学生の個人内変化はどうなっているのかという問いを明らかにすることである。本稿の主な知見は、次の4点にまとめることができる。第1に、(CAVT)アクションは第1～3波調査にかけて順次上昇していたという点である。第2に、(CAVT)ビジョンは第1・2波調査と第3波調査を比べると上昇していたという点である。ただし、第1波調査と第2波調査との間には有意差がなかった。第3に、(能力習得度)学術的基礎能力は第1～3波調査にかけて順次上昇していたという点である。第4に、(能力習得度)社会的能力は第1～3波調査にかけて順次上昇していたという点である。以上から、本稿の結論は、初年次キャリア教育科目の履修過程において学生の個人内変化の実態は、CAVTと能力習得度の上昇であるということになる。

キーワード: 初年次キャリア教育科目、個人内変化、CAVT、能力習得度、自己発見と大学生活

1. 問題設定

本稿の目的は、初年次キャリア教育科目の履修者に対する3時点にわたる質問紙調査によって、初年次キャリア教育科目の履修過程における学生の個人内変化はどうなっているのかという問いを明らかにすることである。

文部科学省の「平成30年度の大学における教育内容等の改革状況について」によれば、初年次教育の導入率は約97%であり、その中には「将来の職業生活や進路選択に対する動機付け・方向付けのためのプログラム」といったキャリア教育の要素も相当程度含まれている。にもかかわらず、初年次キャリア教育科目において学生はどのような要因によっていかなる成長を遂げているのかという点を個人内の変化に着目して明らかにした先行研究は必ずしも多くない。

そこで、本稿では、京都産業大学の初年次キャリア教育科目である「自己発見と大学生活」(以降、「自己大」と略記する)を事例として、そこにおける学生の個人内変化を①下村ほか(2009)によるCAVT(Career Action-Vision Test)と②小山(2019)で使用されている能力習得度に着目しながら記述する。CAVTは、下村ほか(2009)が開発したキャリア教育の効果測定のための指標(尺度)である。能力習得度は、後述するように、大学生に求められる汎用的な能力であり、学術的基礎能力と社会的能力に分かれる。CAVTと能力習得度に着目する理由は、「これらは初年次キャリア教育科目の成果指標と考えることができる」からである(小山 2019: 100)。

研究方法は、京都産業大学で2018年度に開講された「自己大」の履修者に対する3時点にわたる質問紙調査である。本稿が京都産業大学の「自己大」に着目するのは、小山(2019)で述べられているのと同様に、①1年生の多くが履修し、②授業内容が相当程度標準化された科目であるからである。本稿では、小山(2019)と同一のデータを再分析する。小山(2019)では、各調査時点における集計値に基づいて時点間の平均値の差が記述されている。これに対して、本稿では上記のデータが個人追跡型調査によるものであることを活かして、調査時点間の個人内変化を明らかにする。

本稿の構成は次の通りである。2章では、調査対象の初年次キャリア教育科目である「自己大」の概要を説明する。3章では、「自己大」で実施した履修者に対する質問紙調査の概要を説明する。4章では、分析で使用する変数の設定を行う。5章では、「自己大」における学生の個人内変化を記述する。6章では、本稿の主な知見をまとめて結論を示し、今後の課題を指摘する。

2. 初年次キャリア教育科目の概要

本稿が調査対象とするのは、京都産業大学で開講されている「自己大」である¹⁾。

この科目は、全学部1年生のみが履修できる前期の選択科目(2単位)である。2018年度は1クラスの定員が66名であり、全28クラスが開講された。1年生の約57%が履修した。

シラバスは全クラスで共通であり、中沢・松尾(2017)という教科書がある。授業内容はティーチング・ガイドブッ

¹ 京都産業大学 全学共通教育センター

クという担当教員向けの指導書によってかなり標準化されている。例えば、各回の授業で扱う内容とその時間配分が詳細に規定されている。また、担当者会議という授業の振り返りや事務連絡に関する会議が学期中に3回開催されているほか、情報交換会という任意の会議も学期中に2回開催されている。

ウェブ上で公開されているシラバスによれば、本科目の目的は、『自分とはどのような人間か』『どのような大学生活を送るのか』を、様々な形のコミュニケーションやグループワークを通じて考え、自分なりに表現できる』ようになることである。

シラバスによれば、「自己大」は大きく分けて次の2つのパートから構成される。

第1に、「様々な活動と情報を基に自分自身を省察し再発見するパート」である(第1～7回の授業)。ここでは、先輩学生との対話や社会人に対する聞きとり調査等によって、自己理解とそれに基づく大学生活の方針を意識化させることが試みられている。

第2に、「チームで創り表現する活動を行い、それを省察して今後の活動につなげるパート」である(第8～15回の授業)。ここでは、グループワークによるポスター発表(準備を含む)が主な活動となる。クラス内で履修者が5～6名程度のチームに分かれて、「京都産業大学の愉しみ方——新入生におすすめしたい学び方、過ごし方」を大テーマとしたポスター発表に取り組む。

成績評価は、毎回の授業の振り返りを記録するリフレクションノートの内容(50%)、社会人に対する聞きとり調査に基づいたレポート(15%)、ポスター発表(10%)、「私の大学生活」に関するスピーチ(10%)、最終レポート(15%)に基づいて行われる。筆記試験はない。

3. 質問紙調査の概要

本稿の分析で使用するのは、「自己大」の履修者に対する3時点にわたる質問紙調査のデータである。調査名は、「学習状況調査」である²⁾。質問紙の設計は筆者が行った。本調査は、5名の担当教員の7クラス(2名は各2クラスを担当)において、原則として、第1回授業日、第8回授業日、第14回授業日の3回実施された。いずれも集合調査法による自記式質問紙調査である。氏名等を記名式にしたため、3回の調査の回答をマッチングできる。以降では、1回目の調査を第1波調査、2回目の調査を第2波調査、3回目の調査を第3波調査と呼称する。

第1波調査の有効回収数は457ケースであり、7クラスの履修登録者数462名を分母とした有効回収率は98.9%である。第2波調査の有効回収数は410ケースであり、同様の有効回収率は88.7%である。第3波調査の有効回収数は388ケースであり、同様の有効回収率は84.0%である。3回の調査すべてに回答したのは、358ケースである(同様の有効回収率は77.5%)。本稿では、この358ケースを分析対象とする。ただし、分析では欠損値を除外するため、常にケース数が同じであるとは限らない。

表1は、履修登録者、各調査の回答者、分析対象である第1～3波調査すべての回答者の基本的な属性の分布を比較したものである。それによれば、履修登録者、第1～3波調査の回答者において、性別、学部といった変数の分布はほとんど変わっていないことがわかる。換言すれば、調査が進むにつれて特定の層が極端に脱落しているわけではない。この点と前述した高い有効回収率を考慮すれば、学習状況調査には相当程度の代表性があると考えられる。本稿では、「自己大」の履修者

表1. 調査対象者の概要

(%)

		履修登録者	第1波調査の回答者	第2波調査の回答者	第3波調査の回答者	第1～3波調査すべての回答者
性別	男性	55.4	55.1	54.4	53.4	52.8
	女性	44.6	44.9	45.6	46.6	47.2
学部	経済学部	12.3	12.3	12.0	10.3	10.3
	経営学部	14.9	15.1	15.1	16.0	16.5
	法学部	7.1	7.2	7.8	7.7	8.1
	現代社会学部	18.4	18.2	19.0	18.0	18.2
	外国語学部	24.5	24.7	23.4	25.0	24.0
	文化学部	12.1	11.8	12.0	12.9	12.6
	理学部	2.8	2.8	3.2	3.1	3.4
	情報理工学部	6.5	6.6	6.3	5.7	5.6
	総合生命科学部	1.3	1.3	1.2	1.3	1.4
	N	462	457	410	388	358

注：小数点の丸めのため、合計が100.0%にならない箇所がある。

を母集団として想定し、かつ標本が無作為抽出されたと仮定して参考までに統計的検定を行う。本稿の母集団は「自己大」の履修者であるため、分析結果の過剰な一般化には留意が必要である。

4. 変数の設定

表 2 は、分析で使用する変数の操作的定義をまとめたものである³⁾。

本稿では、初年次キャリア教育科目における学生の個人内変化を記述するために CAVT と能力習得度を使用する。

CAVT は、①アクション(6 項目)と②ビジョン(6 項目)から構成される合成変数である。詳細は表中に記載してある通りである。小山(2019)とは異なり、「かなりできている」=5～「できていない」=1 として 6 個の質問項目ごとの平均値を算出した。なお、各時点の Cronbach の α 係数はそれぞれ 0.800 以上であり、内的整合性の高い変数であることを確認している。

能力習得度は、ベネッセ総合教育研究所の「大学生

の学習・生活実態調査」で使用されている質問項目を参考にして作成した。内容は、初年次(キャリア)教育で育成されると予想される 11 個の能力項目である(大学生に求められる汎用的な能力)。11 個の質問項目(各 4 件法)それぞれについて、「とても身についている」=4 ～「まったく身についていない」=1 として因子分析(主因子法、プロマックス回転)にかけたところ、第 1～3 波調査において若干異なる因子構造になった。本稿では、表中にある通り、学術的基礎能力と社会的能力の 2 つの因子に区分し、各因子に相当する質問項目について、上述した得点の平均値を算出した。なお、各時点の Cronbach の α 係数はそれぞれ 0.700 以上であり、内的整合性が一定以上の変数であることを確認している。

表2. 分析で使用する変数の操作的定義

変数名	操作的定義
(CAVT) アクション	次の6個の質問項目(各5件法)それぞれについて、「かなりできている」=5～「できていない」=1として平均値を算出した(理論上の範囲は1～5)。 ①学外の様々な活動に熱心に取り組む ②尊敬する人に会える場に積極的に参加する ③人生に役立つスキルを身につける ④様々な人に出会い人脈を広げる ⑤何ごとにも積極的に取り組む ⑥様々な視点から物事を見られる人間になる
(CAVT) ビジョン	次の6個の質問項目(各5件法)それぞれについて、「かなりできている」=5～「できていない」=1として平均値を算出した(理論上の範囲は1～5)。 ①将来のビジョンを明確にする ②将来の夢をはっきりさせ目標を立てる ③将来、具体的に何をやりたいかを見つける ④将来に備えて準備する ⑤将来のことを調べて考える ⑥自分が本当にやりたいことを見つける
(能力習得度) 学術的基礎能力	次の8個の質問項目(各4件法)それぞれについて、「とても身についている」=4～「まったく身についていない」=1として平均値を算出した(理論上の範囲は1～4)。 ①問いと仮説を立てる力 ②大学の学習に必要な文献を探す力 ③文献や資料にある情報を正しく理解する力 ④文献を批判的に読む力 ⑤自分の知識や考えを文章で論理的に書く力 ⑥自分の知識や考えを図や数字を用いて表現する力 ⑦コンピュータを使ってデータを作成・整理・分析する力 ⑧コンピュータを使って文書・発表資料を作成し表現する力
(能力習得度) 社会的能力	次の3個の質問項目(各4件法)それぞれについて、「とても身についている」=4～「まったく身についていない」=1として平均値を算出した(理論上の範囲は1～4)。 ①異なる意見や立場をふまえて、考えをまとめる力 ②人と協力しながら物事を進める力 ③自分の言いたいことを口頭で伝える力

注：CAVT (Career Action-Vision Test) は、下村ほか (2009) が開発したキャリア教育の効果測定のための指標 (尺度) である。

5. 分析

5.1. CAVT の個人内変化

まず、CAVT の個人内変化を対応のある分散分析(反復測定)によって記述する。

図1は、第1～3波調査のCAVTの個人内変化をまとめたものである。それによれば、次の2点がわかる。

第1に、(CAVT)アクションの平均値は、3.279→3.382→3.651 と順次上昇しているという点である($N=351$)。被験者内効果の検定によれば、この推移は統計的に有意である。多重比較をすると、第1波調査と第2波調査との間には5%水準で有意差があり、第1・2波調査と第3波調査との間には0.1%水準で有意差がある。

第2に、(CAVT)ビジョンの平均値も、3.186→3.254→3.524 と順次上昇しているという点である($N=349$)。被験者内効果の検定によれば、この推移は統計的に有意である。ただし、多重比較をすると、第1波調査と第2波調査との間には有意差がない一方で、第1波調査と第3波調査との間、第2波調査と第3波調査との間には0.1%水準で有意差がある。

5.2. 能力習得度の個人内変化

次に、能力習得度の個人内変化を対応のある分散分析(反復測定)によって記述する。

図2は、第1～3波調査の能力習得度の個人内変化をまとめたものである。それによれば、次の3点がわかる。

第1に、(能力習得度)学術的基礎能力の平均値は、2.325→2.598→2.831 と順次上昇しているという点である($N=350$)。被験者内効果の検定によれば、この推移は統計的に有意である。多重比較をすると、すべての調査時点間に0.1%水準で有意差がある。

第2に、(能力習得度)ビジョンの平均値も、2.753→2.944→3.188 と順次上昇しているという点である($N=355$)。被験者内効果の検定によれば、この推移は統計的に有意である。多重比較をすると、すべての調査時点間に0.1%水準で有意差がある。

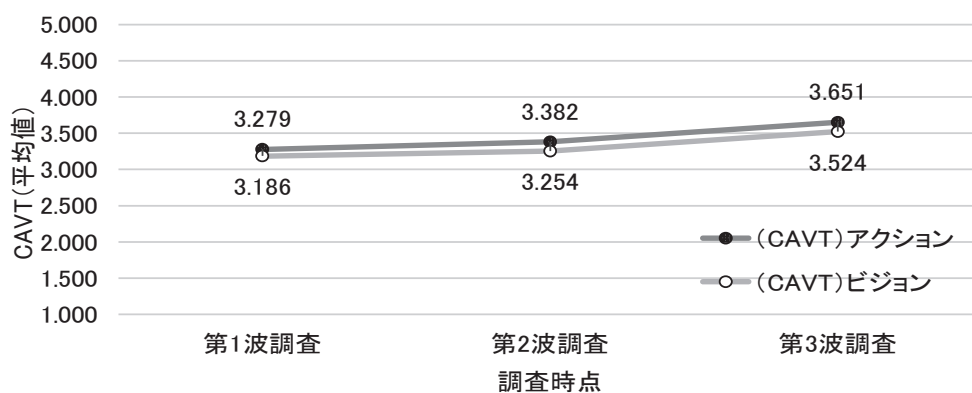
5.3. 考察

以上の分析結果について考察する。

第1に、(CAVT)アクションが第1～3波調査において順次上昇していたのは、①先輩学生やOB・OGに対する聞きとり調査や②社会人への聞きとり調査に基づいたキャリア・インタビューレポートという課題によって、履修者のキャリア探索行動が一定程度促されたからであると考えられる。

第2に、(CAVT)ビジョンが第1～2波調査では変化がないものの、第1・2波調査と第3波調査の間では上昇傾向であったのは、第8回授業以降に該当する「チームで創り表現する活動を行い、それを省察して今後の活動につなげるパート」において、大学生活における方針が一定程度明確化されたからであると考えられる。一方、第1波調査と第2波調査の間には有意差がないという結果は、先輩学生やOB・OGに話を聞くだけでは、将来展望は必ずしも明確にはならないということを示唆している。人生の先輩から話を聞くよりも、ポスター発表という共通目標に向かって集団で課題に取り組むことが結果として(CAVT)ビジョンの上昇と相関があるという知見は初年次キャリア教育科目の授業内容・運営を考える上で興味深い。

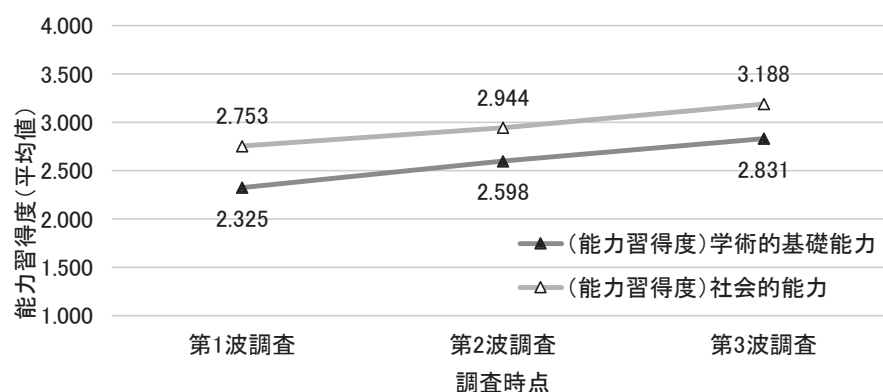
第3に、(能力習得度)学術的基礎能力が第1～3波調査にかけて順次上昇していたのは、小山(2019)で示されているのと同様に、2018年度の「自己大」では問い、仮説、仮説の検証という過程を体験するポスター発表が課されていたことが関係しているように思われる。こうし



注1: (CAVT)アクションの第1～3波調査における $N=351$ である。

注2: (CAVT)ビジョンの第1～3波調査における $N=349$ である。

図1.CAVT の個人内変化



注1: (能力習得度)学術的基礎能力の第1～3波調査におけるN=350である。

注2: (能力習得度) 社会的能力の第1～3波調査におけるN=355である。

図 2.能力習得度の個人内変化

た学術的な学習を擬似体験することによって、専門分野間ではば共通する学術的基礎能力が上昇したと推測される。

第4に、(能力習得度)社会的能力が第1～3波調査にかけて順次上昇していたのは、第8～12回授業のポスター発表(その振り返りを含む)や第13～14回授業の大学生活に関する1分間スピーチといった課題が、他者と協働したり、自分の主張を述べたりするきっかけとなったからであると考えられる。

6. 結論

本稿では、初年次キャリア教育科目の履修者に対する3時点にわたる質問紙調査によって、初年次キャリア教育科目の履修過程における学生の個人内変化はどうなっているのかという問いを明らかにしてきた。本稿の主な知見は、次の4点にまとめることができる。

第1に、(CAVT)アクションは第1～3波調査にかけて順次上昇していたという点である。

第2に、(CAVT)ビジョンは第1・2調査と第3波調査を比べると上昇していたという点である。ただし、第1波調査と第2波調査との間には有意差がなかった。

第3に、(能力習得度)学術的基礎能力は第1～3波調査にかけて順次上昇していたという点である。

第4に、(能力習得度)社会的能力は第1～3波調査にかけて順次上昇していたという点である。

以上から、本稿の結論は、初年次キャリア教育科目の履修過程において学生の個人内変化の実態は、CAVTと能力習得度の上昇であるということになる。

最後に、今後の課題として、次の3点を指摘する。

第 1 に、属性等の他の変数の影響を統制した分析を行う必要があるという点である。本稿では、「自己大」の学習成果と関連する CAVT と能力習得度の個人内変化を記述したことに留まっており、この変化が擬似相関で

ある可能性が残されている。CAVT や能力習得度に影響を与えるのは「自己大」だけではない。この点で、本稿における考察の内容は仮説的なものである。

第2に、個人内変化の要因を明らかにする必要があるという点である。なぜCAVTや能力習得度に上昇がみられたのかという点を明らかにすることは、学生の成長要因を追究することにつながる。学生の成長要因をある程度特定できれば、担当教員は履修者に対する効果的な働きかけを実行できる。また、履修者は成長のための効果的な学習行動をできるようになる。

第3に、「自己大」における学習経験がその後の大学生活や就職活動に対してどのような影響をもたらしているのかという点を追跡的に明らかにする必要があるという点である。「自己大」をきっかけとして、履修者がどのように成長するのか(しないのか)という問いを検討することは、初年次キャリア教育科目にできることとできないことを識別する上で重要である。あれもこれもと初年次キャリア教育科目に内容を盛り込む詰め込み主義は、結果として、担当教員や事務職員の負担増や履修者の消化不良といった「意図せざる結果」をもたらす可能性がある。

謝辭

本稿の質問紙調査にご回答いただいた学生の方々、
質問紙調査の実施にご協力いただいた担当教員の
方々に厚くお礼申し上げる。

本稿は、2018年度京都産業大学教育プログラム支援制度の採択を受けて行った活動による成果の一部である。

注

1)以降の内容は、小山(2019)の記述を踏襲している。
なぜなら、本稿は小山(2019)と同一の授業科目を分析

対象としているからである。

2)以降の内容は、小山(2019)の記述を踏襲している。なぜなら、本稿は小山(2019)と同一の質問紙調査のデータを再分析しているからである。

3)以降の内容は、小山(2019)の記述をほぼ踏襲している。なぜなら、本稿は小山(2019)と同一の変数を再分析しているからである。ただし、本文中で示すように、CAVTの操作的定義を若干修正している。

参考文献

- 小山治 (2019) 初年次キャリア教育科目における学生の成長過程——「自己発見と大学生活」の履修者に対する質問紙調査. 高等教育フォーラム 9: pp.99-104.
- 中沢正江, 松尾智晶 (2017) 自己発見と大学生活——初年次教養教育のためのワークブック. ナカニシヤ出版, 京都
- 下村英雄, 八幡成美, 梅崎修, 田澤実 (2009) 大学生のキャリアガイダンスの効果測定用テストの開発. キャリアデザイン研究 5: pp.127-139

Changes within Individuals during the First-year Career Education of Universities: Focusing on the Scores of Career Action-Vision Test(CAVT) and Generic Skills

Osamu KOYAMA¹

The purpose of this paper is to examine changes within individuals during the first-year career education of universities by conducting a three-wave questionnaire survey of students who took the class of Kyoto Sangyo University. The main findings are fourth-fold. First, the scores of “action” of CAVT(Career Action-Vision Test) which were the index for measuring the effect of career education increased consecutively. Second, the scores of “vision” of CAVT increased almost consecutively. Third, the scores of academic skills increased consecutively. Fourth, the scores of social skills increased consecutively. In conclusion, the scores of CAVT and generic skills increased during a first-year career education.

KEYWORDS: First-year career education, Change within individuals, Career Action-Vision Test(CAVT), Generic skills, Self Discovery through College Life

2020 年 12 月 23 日受理

1 Center for General Education, Kyoto Sangyo University